

令和5年度第三者評価 改善状況報告書

令和6年3月31日

施設名	港区立特別養護老人ホームサン・サン赤坂（短期入所）	施設所管課	保健福祉支援部 高齢者支援課
所在地	港区赤坂6-6-14	指定管理者	社会福祉法人 東京聖労院

改善すべき指摘内容等	対応事業者 (共同事業者の場合記入)	令和6年3月までの改善状況等 (指定管理者記入欄)	令和6年4月以降の取組予定 (指定管理者記入欄)	所管課確認欄 (施設所管課記入欄)
事業所では、毎年策定する事業計画の中で、重点目標や具体的な指標として各種目標数値を示している。計画目標の管理手法として、職員間では情報を共有し、効率的に確認したいとのニーズがあり、ICT化の促進を求める声が多かった。また、介護サービス全体の質の向上と法人独自の各種データ管理の効率化を図るために、クラウド版介護支援ソフトを導入しているが、これらのシステムを効果的に活用することで、ペーパーレス化・DX化を進展させ、管理業務・付随業務等の負荷軽減時間の多くを、本来の介護サービス業務へ振り替えていくことが望ましい。		令和5年11月から介護記録ソフトほのぼのNEXTを導入した。11月にセットアップ作業が開始され、12月は操作説明会がスタートしている。令和6年1月下旬からは特養にてケース記録を試験的にほのぼので入力を開始した。iPadを13台導入することにより、スタッフルーム以外の場面でも入力を可能とした。令和5年8月からはインカムも導入していたため、これまでメモで渡していた情報も瞬時に職員内で共有が出来る環境を整えている。	令和6年4月からは、これまで各部署ごとに作成していた日誌を、施設全体の日誌としてほのぼのNEXTで作成を行い（自動取り込み）、電子印に關してもほのぼの内で行うことが出来るようにし、プリントアウトを行わず処理していくことが出来るようになる。 また、事故報告書についてもほのぼのNEXT内で作成をしていくことが出来るため、基本的にプリントアウトはせずに作成していくことになる。 事務連絡についても、基本機能で社内メールを作成することが出来るため、周知事項や職員に個別アプローチもほのぼのを活用していく。	新たなシステムを導入したことで、業務上の情報の管理や共有を、複数人で同時に、効率的に行うことができる体制を導入した点を評価する。現行の取り組みを維持すると共に、個人情報等の管理の面からも利用者が安心して利用できる体制を維持することと、ICT化により更なる業務負担の軽減を進めるよう、指導していく。
利用者は、午前中の体操や、午後のレクリエーションに参加しているが、現在、ボランティアの受け入れを制限しているため、活動が減っている。特養の行事開催日に当たれば、短期の利用者もともに楽しむことができるが、日常的な楽しみの提供という点では改善の余地がある。日中の過ごし方の充実を図っていくことが望ましい。 また、初回利用者には、ケアマネジャーや家族に電話で感想を聞いているが、今後は、その感想を踏まえ、事業所に対するニーズを把握し、それを満たすため方策を検討していくことが望ましい。		利用者のレクリエーションや行事については、新型コロナウイルスの影響でクラスターを予防するため、規模を縮小して実施した。令和5年度については、新型コロナウイルスが5類に分類された事により、ボランティアの受け入れを以前より緩和し、歌の会、大正琴、リフレクソロジーなどを再開した。今後も世間の感染状況や施設での感染状況を鑑みながらになるが、新型コロナウイルス感染症の流行する前の状態に少しずつ戻していきたいと考えている。	令和6年度については、家族の面会などもフロアに上がってもらい、実施することとしている。実施時間や受け入れ件数などまだまだ縛りがあるが、徐々に感染予防のための制限については緩和傾向にある。ボランティアの受け入れについては、今後、傾聴、車椅子清掃、書道、ネイル、歌謡ショーなどの受け入れする予定。また、納涼祭（夏祭り）については令和6年度は、前年度より更に規模を拡大して実施する予定のため、利用者の付き添いなども家族やボランティアにお願いしていく方向で検討している。家族やボランティア、地域の方々が、以前のように施設に入ってこれる環境を整備することで、利用者の楽しみを今以上に提供していきたいと考えている。	コロナウィルス感染対策に気を配りながらも事業を拡充し、入所者や利用者、その家族のニーズを把握しながら、今以上に楽しめる体制での運営ができるよう、指導していく。
新型コロナウイルス感染症の流行や、最近のインフルエンザの流行を踏まえ、感染予防の観点から地域の人たちとの交流に制限がかかっている。外出支援はまだ積極的には行っておらず、外食支援も行っていないが、地域の商店から食事をテイクアウトして外食の気分は味わってもらっている。コロナ禍前には様々なボランティアが利用者支援に来ていたが、現在は少人数の活動からお願いしている。同じ建物内の児童館からの子どもの訪問も、少しずつ再開し始めている。今後、感染症の状況を見ながら、コロナ禍以前のような地域との活発な交流が望ましい。		令和5年度については、新型コロナウイルス感染症対応強化に努めてきた。令和4年度は大規模なクラスターが施設内で発生したことにより、経常的に、大きな影響を利用者にも受けた。令和5年度については、発生は0ではなかったが、大規模なクラスターを起こさずに運営することが出来ている。この前提のもと、ボランティアについては5名以内のグループでの活動について受入れをしているところである。 納涼祭では、児童の子供たちが施設フロアに上がって来てご利用者と共にゲームを楽しんでもらった。外食会・茶話会ではご利用者から要望を伺いケーキやハンバーガー・お寿司等を職員が買いに行き、別室にて少人数で楽しんでもらった。また1階で行っているりんたろうカフェでは、注文したものをフロアに配達してもらうようにし、フロアにて喫茶室を利用してもらうことが可能となった。 サン・サン赤坂では、児童高齢委員会を開催しており、毎月児童交流についての検討を行い、子供たちとの交流の機会を増やしていった。	令和6年度については、ボランティアの受け入れ人数を1グループ5名以内から10名以内へと受け入れ人数を増やし、演奏・歌・園芸等のボランティア受け入れを少しずつ増やしていく予定。 また、納涼祭の開催方法を1階フロア全体を使用し開催することとしている。以前のような大規模な納涼祭にすぐに戻すことが出来ないと考えているが、感染症対策を行いながら、新しい形の納涼祭を作っていきたいと考えている。 利用者の外出機会を1時間程度であれば、家族と一緒に外出してもらうことを可能としたので、感染状況を確認しながら、施設内での外出行事も少しずつ再開させたいと考えている。	ボランティアや児童との交流の機会を、コロナ前の状態に向けて徐々に拡充し、現状の中でも入所者や利用者が生活を楽しむことができる機会を創出してきたことは評価する。今後は、外出の機会を増やし、更なる交流の機会や行事を再開できるよう指導していく。